

首里城焼失：史実に忠実な復元の機会に

服部, 英雄
くまもと文学・歴史館：館長

<https://hdl.handle.net/2324/2543794>

出版情報：熊本日日新聞. (27894), pp.21-, 2019-11-15. 熊本日日新聞社
バージョン：
権利関係：

首里城焼失

史実に忠実な復元の機会に

短命に過ぎた首里城正殿。心より哀悼の意を表す。信じがたいミスが重なった。徹底的に原因を解明し、二重三重の防災安全(フェイルセーフ)装置で、続く事故を根絶してもらいたいし、可能なはずだ。

首里城跡は沖縄復帰の日、昭和47年5月15日に国指定史跡になった。米軍支配下の琉球政府が指定した史跡18件は、全てその日に本土の文化財保護法による史跡に継承された。首里城は太平洋戦争により壊滅的な打撃を受けた。瓦礫を除去して、その場所には沖縄で初めて設置された大学、希望の琉球大学が建設された。キャンパス外の守礼門は復元されたが、城跡を偲ばせる石積みは何もなかった。

首里城復元が計画され、城内に通じる歓会門・久慶門が復元、昭和57年にキャンパスは移転される。事前の発掘調査に対して琉球大学学生が反対運動をした。できあがった正殿に違和感を感じた文化財関係者は少なくなかった。写真にみる正殿は古色あふれ堂々とした風格があったが、完成した正殿はあまりに色鮮やかだった。

当時、私は文化庁記念物課の文化財調査官だった。大学跡地の発掘調査で1期から7期まで各段階の遺構が検出され、良好な遺存状況が確認された。よく誤解されるが、世界遺産に登録されているのは、この地下遺構、つまり基礎・基壇下部のみである。

復元は沖縄開発庁と建設省が行なった。文化財を担当するはずの文化庁が主体になることはなかった。これではダメだと力説する上司もいたけれど、全体には首里城復元は文化庁の仕事ではないというムードだった。国営公園だから入場料を徴収する。よって展示施設が必要で、南殿は博物館相当の建物、北殿は便益施設として、コンクリートで復元するとされた。文化庁は歴史的建造物の復元にあたっては建築当時の素材＝木を用いること、としていたけれど、復元ではなく「再建」となった。番所、奉神門もコンクリートになって御庭(うなー)地区の木造建物は正殿のみである。

いま首里城入場券を求める人の目的が南殿の展示品であるとは思われない。耐火収蔵庫内の品こそは救出されたけれど、展示中や、それ以外の場にあった文化遺産は焼滅した。はたして、うなー地区に博物館は必要だったのか。北殿(にしうどうん)は清の使者を、南殿(はえうどうん)はヤマト(日本)の使者を迎えた。強いられた中日両属を象徴する歴史的建物であって、正殿とは一体で、写真や柱位置図も残されている。文化財保護法は「文化財は歴史と文化の正しい理解に必要」としている。完全なる復元と、文化庁の積極的な主導を期待する。前回復元の問題点を洗い

出し、より正確で、世界遺産に求められる真正性(Authenticity)を追求したい。今回の事態はあまりに不幸ではあったが、うなー地区での、史実に忠実な復元の機会が再度あたえられたと考え直す。よって復元までには検証の時間が必要である。

諸外国では復元建物でも世界遺産に登録されているものが多い。ワルシャワ市街やエカテリーナ宮殿など、戦争で失われたものの再現である。いつの日にか、首里城(スイグスク)は百浦添御殿(モモウラソエウドウン=正殿の沖縄方言での呼称)建物も含めた世界遺産になる。